

木村悠介

Yusuke KIMURA

Works 2010-2021

木村悠介 Yusuke KIMURA

演出家、「&Co.」代表、「gallop」共同代表。

演劇、ダンス、パフォーマンスなど、舞台芸術を中心にしながらも、インスタレーション作品の制作など領域横断的に活動。映像の歴史や構造に取材した作品や、独自の映写技術「Boxless Camera Obscura (箱なしカメラ・オブスキュラ)」を用いた作品を制作するほか、＜自己の境界の攪乱＞を徹底するテーマとして作品制作を行う。また、2017年からは現代美術のインストーラーとしても活動を行う。

舞台芸術と映像芸術を京都造形芸術大学で学び、その後、岐阜県立情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) にてメディア芸術を学び、修士号取得。2012年よりベルリンに渡り、2013年にベルリン芸術大学内 (UdK Berlin) に設立されている Hochschulübergreifende Zentrum Tanz Berlin (HZT Berlin) の修士課程 Solo/Dance/Authorship (MA SODA) へ日本人で初めて入学し、2015年に修士号取得。2016年に帰国し、日本での活動を再開。

1985	大阪府に生まれる
2004 - 2008	京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科 舞台芸術コース
2008	他3名と共同演出で制作を行う「gallop」を設立し、『馬の最も速い走り方』で京都造形芸術大学 2007年度 卒業制作作品 学長賞受賞
2008 - 2009	NPO 劇研 非常勤職員
2010 - 2012	岐阜県立情報科学芸術大学院大学 (IAMAS) 修士課程 メディア表現研究科
2010	2010年度 情報科学芸術大学院大学特別給費生報奨金 取得
2012	ベルリンに渡る
2013 - 2015	ベルリン芸術大学 (UdK Berlin) Hochschulübergreifende Zentrum Tanz Berlin (HZT Berlin) 修士課程 Solo/Dance/Authorship (MA SODA)
2016	帰国し、日本での活動を再開
2021	長期プロジェクト『罵倒の作法』始動。 スタートアップ・リサーチ『罵倒の作法 - 求められる怒りと憎しみの表現形式を巡って』が京都芸術大学 舞台芸術研究センター 文部科学省認定「舞台芸術作品の創造・受容のための領域横断的・実践的研究拠点」2021年度リサーチ支援型公募研究事業に採択。
2022	アーツカンパニー「&Co.」設立

SELECTED PARTICIPATING PROJECT

2015 - 2018	Choy Ka Fai 演出作品 ダンサー、インタラクティブ・プログラム・デザイナー等として参加 『存在の耐えられない暗黒』(ワーク・イン・プログレス) 2018 / 横浜 『DANCE CLINIC』2017 / デュッセルドルフ、シンガポール 2018 / ウィーン 2019 / ボツダム 『CORTEX: DANCE CLINIC』2016 / デュッセルドルフ 『The Choreography of Things』2015 / ベルリン 2016 / デュッセルドルフ
2010 - 2012	「NxPC.Lab -Next dimension Plural media Club experience. Laboratory-」 ドラァグクイーンとして出演 (aka. キャシー) 岐阜、東京、京都にてクラブイベントを開催
2006 - 2009	「木ノ下歌舞伎」 設立メンバー、企画員・制作として参加 京都・東京にて公演 主宰・木ノ下裕一
2008 - 2009	「劇研なつまつり」(児童向け演劇イベント) 制作として参加 アトリエ劇研 (京都) 企画・米谷有理子、主催・NPO 劇研
2006	「The Bridge Project」 出演者として参加 元・立誠小学校 (京都) 演出・リチャード・フォアマン、主催・京都造形芸術大学 舞台芸術研究センター

SELECTED WORKS

- 2021 gallop『大感謝祭』(パフォーマンス / 構成、総合演出、出演)
UrBANGUILD (京都)
構成、総合演出、出演をほか3名と共同で制作
- 2020 gallop『ダブルプラス・グッドフル・アングッド』(パフォーマンス / 演出、出演)
スタジオ・ヴァリエ (京都)、The CAVE (神奈川)
演出、出演をほか3名と共同で制作
- 2019 『わたしじゃない』(演劇 / 翻訳、演出)
SCOOL (東京)、Lumen garally (京都)
作 / サミュエル・ベケット
初演 / 2016、アトリエ劇研 (京都)、「アトリエ劇研提携公演」
- gallop『石飛びこむ 鯉浮きあがる』(パフォーマンス / 演出、出演)
人間座スタジオ (京都)
演出、出演をほか3名と共同で制作
- 2017 gallop『ユートピア』(パフォーマンス / 演出、出演)
スタジオ・ヴァリエ (京都)
演出、出演をほか3名と共同で制作
- 2014 『I saw a shadow in the dark』(メディア・パフォーマンス / 構成、演出、マルチメディア・デザイン、出演)
Uferstudios (ベルリン)、「SODA WORKS 2014」参加作品
- 『I saw a shadow in the dark – An Archaeology of Film』(レクチャー・パフォーマンス / 構成、演出、マルチメディア・デザイン、出演)
Uferstudios (ベルリン)、「MA Solo/Dance/Authorship (SODA) 3rd Semester Research Presentations」参加作品
- 『body-Sampling-body』(メディア・パフォーマンス / 構成、演出、マルチメディア・デザイン、出演)
FFT Düsseldorf Kammerstücke (デュッセルドルフ)、「Nippon Performance Night」参加作品
初演 / 2011、IAMAS メディア工房 (岐阜)
- 『The Way to Fukushima #2』(インスタレーション)
芸術家会館ベタニエン (Kunstraum Kreuzberg/Bethanien) (ベルリン)、「Distant Observation – Fukushima in Berlin」参加作品
- 2013 『The Way to Fukushima』(インスタレーション)
Uferstudios (ベルリン)
- 2012 『このほかは何も知らない』(インスタレーション)
ソフトピアジャパン (岐阜)、「IAMAS2012」内で発表 (修士作品)
- 2011 『ナラゴニア ナラゴニア』(インスタレーション)
陽だまりの工房 (岐阜)
- 『double fact』(ビデオ・インスタレーション)
IAMASメディア工房 (岐阜)
- 2010 『double fact』(ダンス / 構成、振付、演出、出演)
横浜STスポット (神奈川)、「N.N.N.」参加作品
- 『ナラゴニア ナラゴニア』(パフォーマンス / 構成、演出)
大垣市・郭町商店街周辺 (岐阜)、「おおがきピエンナーレ2010」参加作品
- 2009 『b(r/)light』(ダンス / 構成、振付、映像)
京都芸術センター (京都)、飯名尚人ワークショップ「メディアとダンス」内で制作・ショーイング
- chatty+gallop『確固たる空腹へ』(ダンス、パフォーマンス / 構成、演出、出演)
アトリエ劇研 (京都)
構成・演出・出演をほか3名と共同で制作
- 2008 gallop『馬の最も速い走り方』(パフォーマンス / 構成、演出、出演)
京都芸術劇場 春秋座舞台裏 (京都)
構成、演出、出演をほか3名と共同で制作
京都造形芸術大学2007年度卒業制作作品、学長賞受賞
- 2006 aspicio「セーヌ・エ・オワーズの陸橋」(演劇 / 演出)
京都造形芸術大学 スタジオA (京都)
作: マルグリット・デュラス
- aspicio「カムサアンキ ver.2」(演劇 / 構成、演出、出演)
京都芸術劇場 studio2 (京都)
- 2005 aspicio「カムサアンキ」(演劇 / 構成、演出)
京都芸術劇場 studio21 (京都)

gallop - 大感謝祭

gallop - Great Thanksgiving Day - 2021 - Performance

多彩なゲストが、演劇、ダンス、音楽、味噌作りなど、それぞれ「出し物」を持ち寄り、パフォーマンスを繰り広げた。

コロナ禍の中で人と人とのコミュニケーションが著しく妨げられている中で、私達は「誰かに感謝する」という機会を著しく見失っているのではないかと、そのような問いを立てた上で、あえて他者への感謝をテーマに作品を制作。

こんにちは、gallopです。

みなさん、この1年はどんな風に過ごされましたか？

私たちは、この1年で筋肉が落ちました。

その筋肉は、不要不急なことをするための筋肉でした。

今の世の中では必要とされないことをするためのものでした。

私たちは、その筋肉を取り戻したい。

今回私たちは、「大感謝祭」をします。

SNSで叩かれないように体裁を整え、ゲストを呼ぶという新しいことを取り入れ、応援していただけるようになりふり構わず、目が回るまで楽しみたいと思います。筋トレをして！

これまで通りが出来ないなら、私達はバカみたいにまわってみせる！感謝の気持ちを込めて！！

gallop



初演 / 2021年、UrBANGUILD (京都)

上演時間 / 90min

構成・総合演出・出演 / gallop (伊藤彩里 / 木村悠介 / 三鬼春奈)
夢の豪華ゲストたち / 一色バンド、桐澤千晶、
三田村啓示と劇の虫ほか、山口恵子♡長洲仁美、UPNE
照明 / 真田貴吉、音響 / 森永恭代、林実菜 衣装 / 吉藤濯 (izon)
舞台監督 / 脇田友 (スピカ) 舞台監督助手 / 中村彩世
宣伝美術 / 児玉悟之
記録写真 / 脇田友 (スピカ) 記録映像 / 朝倉太郎 制作 / 阪田愛子
文化庁「ARTS for the future」補助対象事業
主催 : gallop

gallop - ダブルプラス・グッドフル・アンゲッド

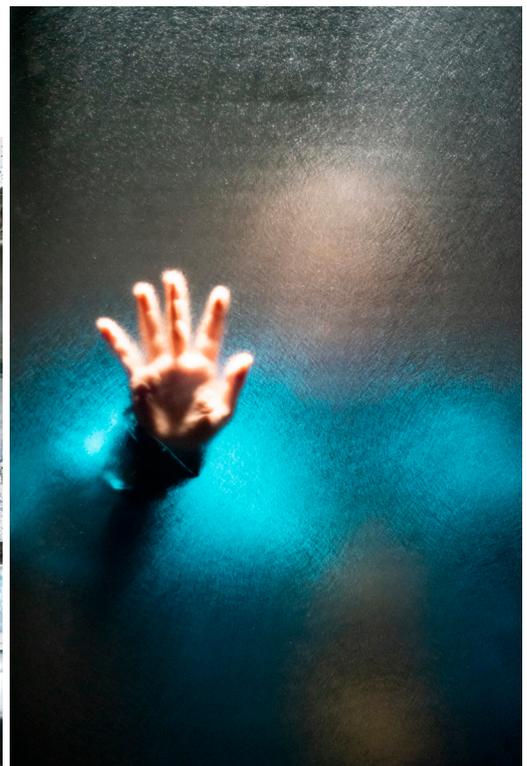
gallop - DOUBLEPLUS GOODFULL UNGOOD - 2020 - Performance

—戦争は平和なり！ 自由は隷従なり！ 無知は力なり！—

ジョージ・オーウェルの小説『1984』という重厚でシリアスなモチーフを、gallopの持ち味であるシュールな空気感や突拍子もないアイデアと共に展開するパフォーマンス。監視と秘密、検閲と自由、愛と憎悪、言語と思考、存在と不在、様々なキーワードが渦巻き思考する。私たちの日常を支配する力とは何なのかを見極め、抵抗するために。

この作品はジョージ・オーウェルの『1984』をスタート地点に創作を開始しました。けれども、『1984』の物語を表現しようとしたわけではありません。そこから連想された様々なモチーフや得られた印象などから、イメージや言葉を紡いでいき、時には全く関係のないイメージも取り込みながら創作を進めてきました。それは『1984』的なものを、その物語世界から離れて、自分たちの中や周辺から取り出していく作業だったように思います。

gallop



初演 / 2020年、スタジオ・ヴァリエ (京都)、The CAVE (横浜)
上演時間 / 60min

演出・出演 / 伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈
照明 / 真田貴吉 音響 / 森永泰代 舞台監督 / 脇田友 (スピカ)
宣伝美術 / 児玉悟之 絵 / 栗原那津子
記録写真 / 脇田友 (スピカ) 制作 / 豊山佳美 桐澤千晶
京都芸術センター制作支援事業
「TPAM 2020」フリンジ参加作品
主催 / gallop

わたしじゃない

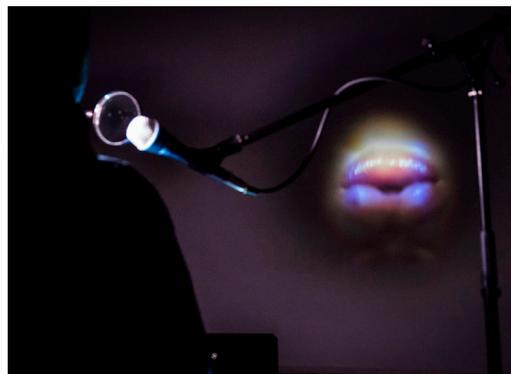
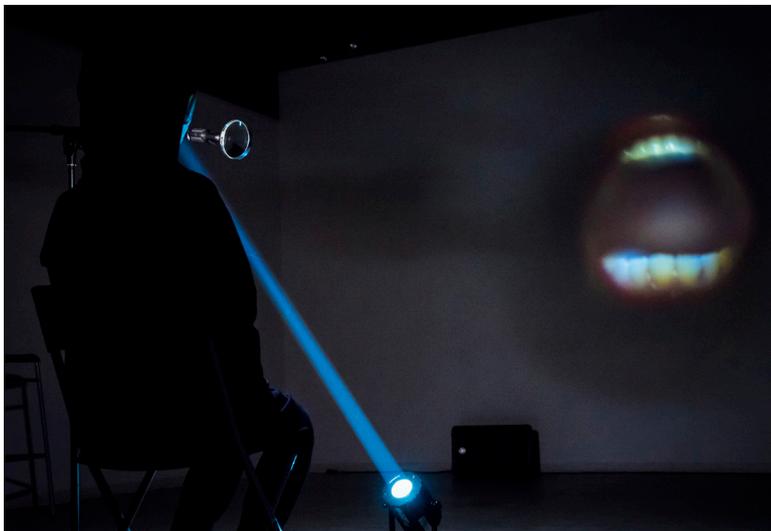
Not I - 2016, 2019 - Theater

暗闇の中に浮かび上がる「口」が「彼女」と呼ばれる何者かの物語を語り続ける、ベケット後期戯曲の問題作を、木村自身が新たに翻訳し、上演。

2016年の初演では独自の世界を持つ男女3名のトリプル・キャストによって同作を連続的に演じることで、反復して語られる「彼女」の物語と、その差異を強調する公演形式をとった。そして2019年の再演ではさらに1名、英語での上演が加えられた。

木村が前作『I saw a shadow in the dark』で発見したレンズを用いた映像投影技術は、本作をきっかけに「Boxless Camera Obscura(箱なしカメラ・オブスキュラ)」と名付けられ、ベケットが戯曲で指定した「暗闇に口だけが浮かび上がる」という特異な演劇空間と結びつけながら本作に導入された。従来の「カメラ・オブスキュラ」と違い、対象物とレンズ、投影された映像が全く隔たりのない同一空間に存在することで、映像表現の最もプリミティブな構造を直感的に露わにする。そして、被写体となる生身の実体と、純粋な光学現象によって投影された美しくも精細な虚像が並置される空間は、映像の本来の不可思議さを見る者に体験させる。

そして極限までミニマムに削ぎ落とされた実体と虚像の奇妙なアンサンブルは、俳優の身体と俳優の口、発声器官としての口と口の表象、語る口と語られる「彼女」、主体と客体、人間と事物、あらゆる境界を静かに、しかし激しく攪乱する。



初演 / 2016年、アトリエ劇研(京都)「アトリエ劇研提携公演」
再演 / 2019年、SCOOL(東京)、Lumen gallery(京都)
上演時間 / 50min

作 / サミュエル・ベケット 翻訳・演出 / 木村悠介
出演 / 伊藤彩里 神嶋知(2019) 増田美佳 三田村啓示
舞台監督 / 脇田友(スピカ/2019) 制作補佐 / 桐澤千晶(2019)
記録写真 / 脇田友(スピカ/2019) 記録映像 / 竹崎博人(2019)
上演許可取得代理 / フランス著作権事務所
助成 / 全国税理士共栄会文化財団(2019)
主催 / 木村悠介

gallop - 石飛びこむ 鯉浮きあがる

gallop - Diving Stones, Floating Carps - 2019 - Performance

本作は「白夜」をモチーフに、終わらない昼間、時間が伸び続ける感覚、反復が継続に変わる感じ・・・などイメージを広げ、私たちの「生の感覚」に潜む、ある時間の感覚を表現した。ある特殊な時間の中に、日常的な仕草や語り、H&Mの衣服、自然現象のように繰り返されるある出来事などが静かに移り変わりながら展開し、私たちを取り巻くある雰囲気と、その中で生きる人々の姿や繋がりを提示した。

今回の作品は、「白夜」をキーワードに制作を進めてきました。それは自然現象としての実際の「白夜」のことではありません。また、私たちは「白夜」に憎しみも愛しさもありません。ただ、「白夜」のような時間のことを考えていました。それはどこか別の世界の時間ではなく、きっと誰もが経験したことのある時間なのだと思います。

gallop



初演 / 2018年、人間座スタジオ(京都)
上演時間 / 80min

構成・演出 / gallop
出演 / 葵マコ、伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈
照明 / 真田貴吉 音響 / 森永泰代 舞台監督 / 脇田友
衣装コーディネーター / 吉藤濯 音楽製作 / P.O.T.M.
演出助手 / 長洲仁美
宣伝美術 / 児玉悟之 記録写真 / 脇田友 制作 : 豊山佳美
助成 / 全国税理士共栄会文化財団
京都府文化力チャレンジ補助事業
主催 / gallop

gallop - ユートピア

gallop - Utopia - 2017 - Performance

観客を<ユートピア>へと誘いつつ、理想の場所を模索するパフォーマーたちの姿を通して、変わることなく繰り返される私たちの日常に対する違和感を描いたパフォーマンス。『馬の最も速い走り方』から9年振りにメンバー全員が再集結し、作品制作が行われた。



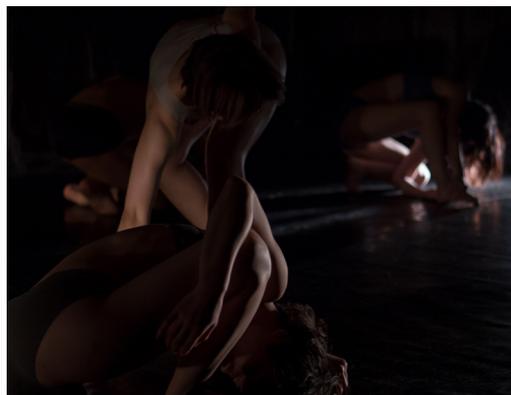
「開演すると三鬼が現れ、客席に向かって鳥ハムの作り方を説明する。彼女が「冷蔵庫で一週間は保存がききます」と言い残すと、毛むくじらの着ぐるみを着た葵が現れ客席数を数える。するとスーツケースを持った木村がパッキングの仕方を伝え、最後に伊藤が同棲についての理念を語ると残りの3人が舞い戻り、服を脱いで全裸となる。全裸となった彼らは全員で朴訥な言葉を発したり丸い光の上をジャンプしたり花嫁になったりと様々なパフォーマンスを行う……。

(中略)

彼らのパフォーマンスの抛り所は平凡な「言葉」と「身体」に頼らざるを得ない。その二つによって出来ることはそう一つ、「言葉」と「身体」の摩擦、それにより「言葉」にならない一回性の「何か」を生み出すこと（「言葉にならない何か」、それは芸術と同義である。）

ピンク地底人3号（演出家）

京都芸術センター通信 2018年1月号『ユートピア』レビューより



初演 / 2017年、スタジオ・ヴァリエ（京都）
上演時間 / 60min

演出・出演 / 葵マコ、伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈
照明 / 川添真理 音響 / 大崎健志 舞台監督 / 脇田友
宣伝美術 / 児玉悟之 記録撮影 / 長崎由幹
京都府文化力チャレンジ補助事業
京都芸術センター制作支援事業
主催 / gallop

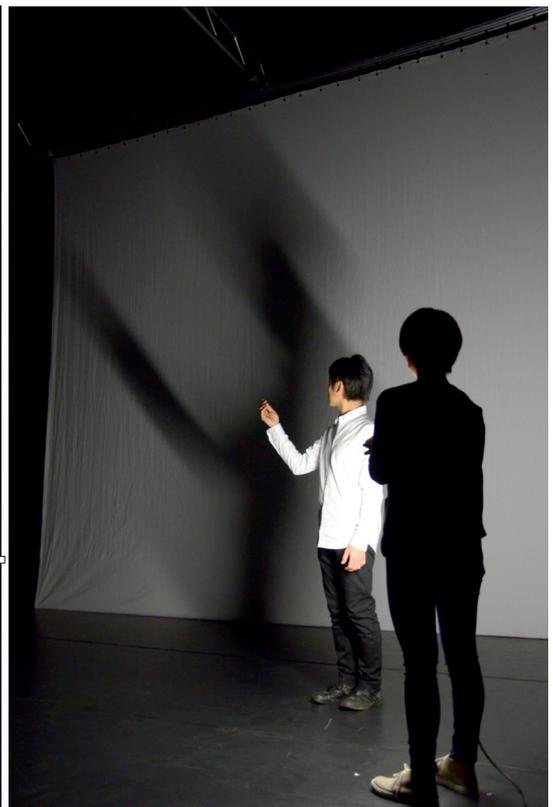
I saw a shadow in the dark

I saw a shadow in the dark - 2014 - Media Performance

1960年代、70年代の実験映画、特に「Structural/Materialist Film (構造=物質主義的映画)」や「Expanded Cinema (拡張映画)」と呼ばれる作品や映画前史における様々な試みを参照項に、ヴィジュアル・メディアの過去から現在までの広範な歴史的パースペクティブと、出演するパフォーマーたちの映画にまつわる記憶や、自身の影の消失を語る何者かの物語が折り重なりながら展開するメディア・パフォーマンス作品。

今日のメディア環境の変化に伴う、我々を取り巻く現実や自身の身体に対する認識や感受性の変化

の検証と、上映というひとつの行為によって虚構的な時間と空間が立ち上がることの原初的な驚きと喜びを再認識しつつ、ヴィジュアル・メディアがもたらす独自の知と感性を舞台芸術という異なるコンテキストの中で再構築した。



初演 / 2014年、Uferstudios(ベルリン・ドイツ)
上演時間 / 60min

構成・演出・マルチメディア デザイン / 木村悠介
出演 / 井上知子、木村悠介
照明操作 / 鈴木光 音響・映像操作 / 新庄範子
プログラミング助手 / 内藤暁 記録写真 / 前田祐未子
指導員 / Mark Coniglio, Maroan el Sani, Siegmund Zacharias
担当教員 / Sophia New
Special thanks / Nina Fischer
主催 / HZT Berlin

The Way to Fukushima

The Way to Fukushima - 2013 - Installation

2013年9月に木村悠介が震災後初めて福島へ訪れた際に撮影された写真、その時に着用していた衣服、ベルリンへ戻った後に撮影されたセルフ・インタビューなどで構成されたインスタレーション作品。東京から仙台までを繋ぐ常磐線は震災以降、福島の警戒区域によって分断されたままになっており、木村はその路線に乗り東京から福島へゆっくりと向かって行く。一つの個人的体験が複数のメディア、マテリアルによって断片的に語られ、観客はそれらを巡りながら作家(他者)の体験を自身の中に再統合することを求められる。そのプロセスは、作家自身が旅の中、目の前の何の変哲もない日常の風景と自身の記憶や想像力を組み合わせながらそこで暮らす人々の現実を思考していたことと重なっていく、他者の現実を知ることの困難さとそれを試み続けることの必要性を静かに訴える。



マテリアル / スライドショー (プロジェクション)、
セルフ・インタビュー (モニター)、
ドキュメント (写真、地図、作家による補足コメント)、衣服

2013年、Uferstudios
(ベルリン・ドイツ)

「Distant Observation - Fukushima in Berlin」 出展
2014年、芸術家会館ベタニエン
(ベルリン・ドイツ)

このほかは何もしらない

I know nothing beyond this - 2012 - Installation

—自分が知ることのできる範囲の限界は、どこまでなのだろうか？

—自分が経験しなかったことを、知ることができるだろうか？

この素朴な問いを携えて制作された本作は、ある架空の光景を再現する。ブルーシートに覆われた部屋。壁には土がこびりつき、この部屋が地面から1mほどまで土に埋まっていたことを示している。部屋の外では、これが実際に埋められた時のドキュメントを見ることができる。部屋の中には、1台のデスク。天板部分がモニターになっており、観客はイスに座って映像を鑑賞することになる。そこには時折、何者かの手が現れる。

東日本大震災後に、現実とフィクション、映画やドキュメンタリー、パフォーマンスの文脈を引き込みつつ、〈私〉が知ることのできる限界を見つめ、そこに〈他者〉をいかに呼び込むかを問いながら、何らかの出来事の現場とそれを経験した人、そしてそこからは離れた場所〈非-現場〉でそれを経験しなかった人、それらの境界を攪乱しながら〈他者〉を経験することの可能性を模索した。

—たとえそれが、偽物であっても。



マテリアル / 木材、土、ブルーシート、ロープ、衣服、シャベル、長靴、写真、モニター、蛍光灯
『IAMAS 2012』 出展
2012年、ソフトラビヤ ジャパン 岐阜・日本

body-Sampling-body

body-Sampling-body - 2011, 2014 - Media Performance

映像と身体によるメディア・パフォーマンス。

生身の身体が、舞台上に設置されたカメラによってリアルタイムにサンプリングされ、映像の中で分裂し増殖していくことで、<いま・ここ>にあるはずの身体を不確かで不気味な存在へと変貌させていく。舞台上の身体によるムーブメントの一回性と映像の中の身体の反復性が対比されながら、本来は先に存在しているはずの現実の身体に先行して映像の中の身体が「ダンス」を生み出し始めるという倒錯が引き起こされる。

2001年にコンテンポラリーダンスの山田せつ子と実験映像の伊藤高志のコラボレーションによって制作された『Double / 分身』から着想し制作された。上演中の撮影やプロジェクションは全て自動制御され、そのシステム構築やプログラミングも木村が行った。全てを一人で行うことで、舞台上の自らの身体を自ら分解し、身体と自己とのラディカルな関係性を新たに生成していく過程を提示した。



初演 / 2011 年、IAMAS メディア工房 (岐阜)
再演 / 2014 年、
FFT Düsseldorf Kammerspiele (デュッセルドルフ・ドイツ)
上演時間 / 15min

使用プログラミング・ソフトウェア / Max
構成・演出・システム構築・出演 / 木村悠介

double fact

double fact - 2010 - Dance

「僕たちは死人なんだよ。」

「私たち、まだ死んでなんかいないわ。」

「肉体的にはね。でも、同じことなんだ。生きることも、死ぬことも。」

「... ねえ、私の胸、好きじゃない?」

—様々な二重性を内包する身体、そして生きることそのもの。

ジョージ・オーウェルの『1984』から、私たちは生きていけると言えるのだろうかと問う主人公たちの会話を引用しながら、生の実感に確信を持ってないまま、それでも生き続ける人の姿とその身体の在り方を、独特のユーモアを交えつつ描いた。

舞台上では、一人のダンサーの身体が写真や映像に映し出され、それらが生身の身体と共に等価物として並置されていく。現実の身体と映像や写真の中で表象された身体の間の奇妙な緊張関係の中で、それぞれが自己の存在を主張し始める。



初演 / 2010年、横浜 ST スポット (神奈川)
上演時間 / 30min
構成・振付・演出 / 木村悠介
引用テキスト / ジョージ・オーウェル『1985年』
出演 / 松木萌、吉本和樹、木村悠介
写真提供 / 吉本和樹 ガジェット製作 / 坂本隆生
記録写真 / 金子愛帆
NPO 法人 ST スポット横浜主催「N.N.N.」参加作品

「N.N.N.」
企画制作 : ST スポット
監修 : KENTARO!!
共催 : 横浜市
助成 : アサヒビール芸術文化財団
特別協力 : 急な坂スタジオ
協力 : Crackers boat, CAN, Inc.

chatty+gallop - 確固たる空腹へ

chatty+gallop - Toward The Convinced Hunger - 2009 - Dance Performance

私たちは咀嚼すればする程、空腹になる生き物です。
私たちに指示者はいません。
私たちは盤上に置かれた駒であり、打ち手でもあるのです。
私たちはいつも何かを求めています。
私たちはそれを求めています。
ダンスや言葉を使って、駒を動かして行くのです。
しかし、私たちは勝つための方法を探しているのではないのです。

当時ダンス・ユニット「chatty」のメンバーとして活動していた花本ゆか、松木萌（現・「はなもとゆか + マツキモエ」）と gallop の木村悠介、三鬼春奈が参加したコラボレーション作品。両者共に共同演出で制作をする集団ではあるものの、ダンスとパフォーマンス、身体と言葉など、用いる表現や制作の方法論が異なる中で、双方を尊重しながらも更に新たな創作のプロセスを探究した。私たちが日々感じる「曖昧な空腹感」は何なのかを問いつつ、「確かな何か」を探し求めるパフォーマンス。



初演 / 2009年、アトリエ劇研 (京都)
上演時間 / 60min

構成・演出・出演 / 木村悠介、花本ゆか、松木萌、三鬼春奈
映像出演 / 葵マコ
美術 / 宇田川依里 照明 / 筆谷亮也 音響 / 荒木優光
映像 / 鴨嶋美幸 舞台監督 / 釈迦谷智
宣伝美術 / 児玉悟之 記録撮影 / 遠藤幹大 制作 / 上田千尋
主催 / chatty+gallop

gallop - 馬の最も速い走り方

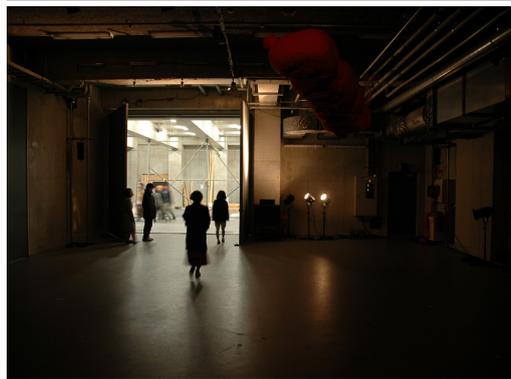
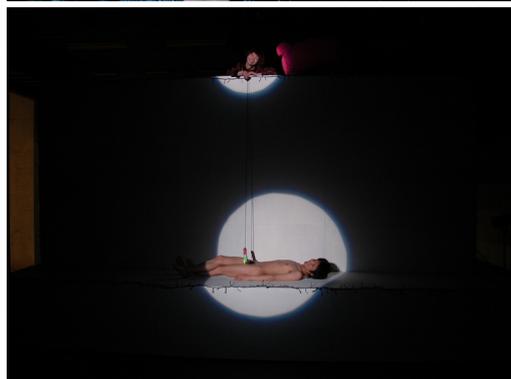
gallop - The Fastest Running Form of Horses - 2008 - Performance

言語に対する嫌悪や、公演の最中にまとう種々の衣服を仮の住まいと考えているのと並行して、彼らは自身の身体をアイデンティティの根拠にしない。彼らにあって身体、言語、衣服は断片化され、暗黒の終末に至るまではかなく浮遊しているのである。

市原研太郎

演劇、ダンス、パフォーマンス、美術、ストリップなどそれぞれ様々なバックグラウンドを持つ葵マコ、伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈がユニット「gallop」として共同制作した本作品は、京都造形芸術大学の卒業制作作品として発表され、学長賞を受賞した。

パフォーマーそれぞれの個人的な秘密の告白から舞台は始まり、その自身の告白の言葉自体への不信感を伴いながら、様々なパフォーマンスが繰り返される。舞台上において、観客に対して誠実であること、自身の真実を語ることは可能かを問いつつ、そのための方法を模索するパフォーマンス作品。



初演 / 2008年、京都芸術劇場 春秋座舞台裏倉庫(京都)
上演時間 / 50min

構成・演出・出演 / 葵マコ、伊藤彩里、木村悠介、三鬼春奈
美術 / 宇田川依里 音響 / 出口展絵
照明プラン / 葵マコ 照明操作 / 桐澤千晶
舞台監督 / 三鬼春奈、木ノ下裕一
宣伝美術 / 児玉悟之 制作 / 伊藤彩里、松木萌、斎田千織
記録写真 / 相模友士郎、長屋耕太
主催 / gallop、京都造形芸術大学 映像・舞台芸術学科
京都造形芸術大学 2007年度卒業制作作品 学長賞受賞